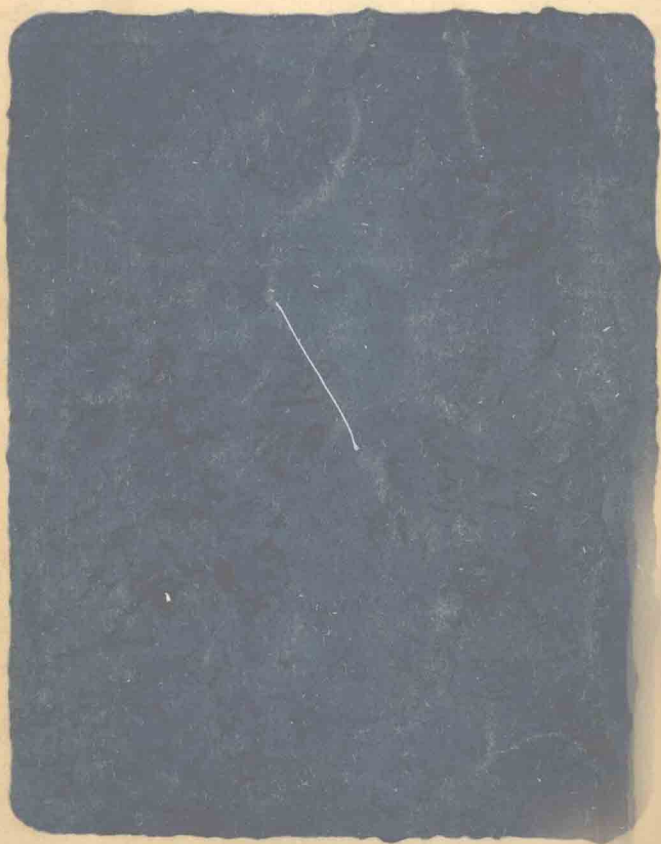


金色の喪章

佐野 洋



新潮 ポケット・ライブラリ

金色の喪章

著 者 佐 野 洋

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式
会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町71番地

電話東京 (280) 1111 (大代)

振 替 東 京 8 0 8 番

印 刷 所 株 式 会 社 金 羊 社

製 本 所 憲 專 堂 製 本 所

定 価 2 6 0 円

1964年12月 6 日 印刷

1964年12月10日 発行

乱丁、落丁本は本社又
はお買求めの書店にて
お取替えいたします。

佐 野 洋

金 色 の 喪 章

66

新 潮 社 版

目次

第1章	金色の肌		七
第2章	重要参考人		五
第3章	特殊な事情		六
第4章	幾つかの情報		三
第5章	女流評論家		八
第6章	金色の喪章		三

金色の喪章

第1章 金色の肌

1

飛行機の出発時刻までには、まだ、かなりの間があったが、案内のスピーカーが、通関手続きの始まったことを告げ始めた。

その放送は、日本語と英語とで、二度くり返された。

「じゃあ……」

見送られる役の藤本教授は、放送がまだ終わっていないうちに、こう言って右手を軽く上げ、見送り人たちの輪を離れて行った。輪の中心にいた教授の夫人が、

「お気をつけて……」

と言ったが、すでに国際線搭乗口の赤いじゅうたんに忙しげな足を運んでいた藤本は、振

り返ろうとしなかった。

「相変らずせっかちで……」

夫人が、偶然そばにいた紀原に苦笑を洩らした。

「いや、あれが先生のいいところなんですよ。先生ぐらいになると、外遊なんて珍しくないから、見送りの者に、大騒ぎをして手を振ったりするのがてれくさいのでしょう」

「そうかしら？　でも、こうやって、研究室のみなさんが、わざわざ来て下さったのだから、もう少しご挨拶のしようがあるでしょうに……」

貴子夫人は、単に紀原ひとりに向って話していいのではないような口調で言った。周囲の研究室員にも聞いてもらい、夫の無造作すぎる態度を代りに詫びようとしているのだらう。

「しかし奥さん、もし、先生がぼくらに向って、わたしのいい間も、しっかりやってくれよなんておっしゃったら、却って気味が悪いですよ。事故でも起きるのではないかと、心配になってしまう」

紀原のそばから、講師の古川がそんなじょうだんを言った。

「本当。案外、そうかもしれないわね」

夫人は、鷹揚に笑って合槌を打った。

すでに四十歳の半ばを過ぎているはずだったが、むき出しになった二の腕あたりにも、中

年肥りのきざしは見られない。並んで立つと夫の藤本より高いくらいの大柄なからだを、濃紺のワンピースが、見事に引き締めていた。真珠のネックレスの白さが、鮮やかであった。

横浜にあるS学園医科大学法医学科の研究室が、さながら家族的雰囲気を持っているのは、夫人の存在が大いに与っているようだ。研究室員や学生が、大して用もないのに、藤本の自宅を訪問し、二、三時間話して帰るというようなことがよくあったが、それは、貴子夫人の魅力にひかれて……ということができる。そういうとき、夫人自身も、いかにも楽しげに座談の相手になってくれた。

「あ、そうそう。紀原さん、征子さんを見かけなかった？」

夫人は、何を思い出したのか、急に声をひそめて紀原に言った。

「征子？　なぜです？」

別居中の妻の名が、夫人の口から洩れたことに、紀原は軽い狼狽を感じた。

「きのうだったか、おとといだったか、征子さんから電話があったの。藤本の出発の時刻を問い合わせて……。だから、ことによると、送りに来て下さるのかと思っていたんだけど……」

「さあ、見ませんでしたか……」

紀原は、改めてロビーを見回した。探すというほどの気持ではなかったが、もしやという

期待もあった。

「そう……。あなた方の別居の理由というの、よく知らないけれど、もし、ここで征子さんと会って、話し合いの機会が作れればと思ったのよ」

「はあ、しかし……」

紀原は言葉を濁した。征子が身の回りのものだけをまとめ、家を出て行ってから、三カ月になる。その原因となった事情は、紀原の側に責任があるとも言えたが、当時はやはり腹が立った。征子からの申し出があるまでは、決して話しに行ったり、訪ねたりしまいと決め、無理に、意識から征子を追い出していた。こうして三カ月が経つてみると、いまは、彼女の不在の生活に慣れ、忘れていくことの方が多かったのだが……。

だが、夫人が、紀原たち夫婦の別居の理由を知らないと言ったことは、紀原の気持を或程度楽にした。それでは、藤本は紀原が外遊を断わった事情を、夫人にも話していないのだらうか？　そういう点にけじめのある藤本に、紀原は改めて感謝した。

——征子の家出の原因になった事情。それがなければ、この夜藤本が発ったフランクフルトの学会には、紀原が出席するはずであった。紀原は藤本から、その外遊の話を持ちかけられたとき、『事情』は匿して、承諾してしまおうかとも考えた。そうしたところで、何の支障も起きないかもしれないのだ。いや紀原自身の気持としては、支障や事故が起るはずはな

いと考えていた。しかし、万一ということがある。言語、風俗の違う外国で、その万一の事態があったら……、そう考えると、この話を辞退せざるを得なかった。

「折角ですが、今回は……」

紀原が唇を噛みながらこう言うと、藤本は信じられないというように訊ね返した。

「え？　なぜだい？」

「はあ、ちょっと個人的な事情がありまして……」

「それは、どんな事情なのだ？　君とわたしとの仲だ。言ってみ給え。わたしにできることなら……」

「はあ……、実は……」

藤本にそこまで言われては、隠し続けることはできない。紀原は、自分自身でもまだ半信半疑で、しかも確かめようのないその『事情』を、藤本に打明けたのである――。

2

やがて、研究室員たちは、夫人に挨拶をして散り出した。空港の駐車場に車を置いてある紀原は、夫人に送ろうと申出たが、夫人は今夜は兄の家へ行くからと断わった。

「じゃあ……」と、紀原は軽く頭を下げた。

「征子さん、やっぱり来なかったのかしら？ 通関手続きのことなど知らずに、出発時刻ぎりぎりに来るかもしれないから、もう少し待っていらっしゃったら？」

「はあ……。しかし、どうもきょうは……」

紀原はいい加減に言葉をごまかして、夫人のそばを離れた。

こうした場所で、偶然に征子と会い、

「やあ、どうしている？ 元気？」

「まあね。あなたは？」

というような会話を交し合う。それは紀原にとって、多少魅力のあることであつた。征子の住所に訪ねて行ったり、友人を間に立てたりするより、自然であるだけに、お互いのぎこちなさはないかもしれない。二人の顔の合わせ方として、最良の形であるという気がした。

しかし、征子がここに現われる保証はないのだった。来ないかもしれない別居中の妻を待つて、神経をじりじりと焦らすのはいやであつた。彼女が現われなかった場合の屈辱感も、予測できた。

国際線ロビーから外に通ずる階段のところで、講師の古川が待っていた。

「紀原さん、今晚お忙しいですか？」

「いや、別に……」

「県警のお仕事は？」

紀原はS医科大学の助教授であると同時に、神奈川県の監察医を委嘱されていた。これは、県下に於ける事故死体の検案をし、死因を明らかにするのが職務である。

「いや、今晚はいいんだ。本当は当直だったんだが、明けてもらった」

——監察医の制度は、一九一五年にアメリカででき、昭和二十二年、連合国総司令部の命令で、日本にも移植されたものであった。それによると、東京には都監察医務院が置かれ、他の五大都市では、その医科大学に委嘱し、さらに他の地方では、警察医が死体監察の業務をすることになっていた。

そのため、紀原は大学の教師としてのほかに、週に何日かは、いわゆる当直をしなければならぬ。管内のどこかで異常死体が発見された場合には、警察から迎えが来て、直ちに現場へ行き、死体の検案をすることが義務づけられているのだ。当直の夜ばかりではなく、深夜、電話で叩き起されるようなこともあった。日によっては、当直の監察医だけでは手が回りかねるのであった——。

紀原は、この夜、その当直に当たっていたが、藤本の見送りがあったため、前以て、他の監察医に頼み、交替してもらっていた。互いの都合により、スケジュールの交換をし合うこと

は、これまでも何回もあった。

「それでは……」

と古川は言った。「どこかで、少し飲みませんか？　せうかく東京へ出て来たんだから、このまま帰るのももったいない気がするんですが……」

「うん。そうだな。目黒の方にも行ってみようか？」

紀原は、目黒という地名を口にしたことに、自分ながら、途惑いを感じた。家を出た征子は、もうその翌日に、目黒区内にアパートを見つけ、そこに落着いたという葉書を寄越している。『目黒の方にも……』と言ってしまったのは、いつになく、彼の意識を征子が占めているという証拠なのだろうか？　とすれば、それは藤本夫人から征子の電話のことを聞いたことに、原因が求められる……。

「目黒？　それはまた……。何か、紀原さんの行きつけのところでも？」

「いや、そんなわけでもないが……」

二人が、空港ビルの外に出ると、かなり強い雨になっていた。午後から、雨模様ではあったのだが、どうやら本格的な降りになったらしい。

ワイパーをせわしなく動かした車が、しぶきを飛ばしながら、彼らの目の前を走り抜けて行った。

「弱ったな。これでは、駐車場に行くまでに、ずぶ濡れになってしまう」

紀原の車が置いてある空港内の駐車場までは、距離にして、百メートル近くあった。

「じゃあ、これを着て行つて下さい。ぼくはここで待っていますから……」

古川が、手に持っていた卵色のバーバリを渡した。

「うん。じゃあ、濡らして悪いけれど……」

紀原は、古川のレインコートを頭から冠り、駐車場へ駆けて行つた。駆けながら腹が立つて来る。せっかく有料の駐車場を作りながら、なぜ、地下道もついでに設けなかったのか？ 雨の日のことは考えなかったのか？ それとも予算がなかったというのか？

3

しかし、紀原は、想像していたほど濡れずに、自分のコ罗纳のそばにたどりつくことができた。ポケットから、キイを取り出し、ドアに差しこもうとすると、肩を叩くものがあった。

「え？」

紀原は手を止めて振り返った。赤いレインコートを着て、黄色のスカーフを冠った征子